小山台高校　天文班新聞　第３号　２０２５年６月１３日

天文班新聞

編集者
天文班　２学年

レグルス 火星に接近は 17 日か

春の夜空に輝くしし座の一等星レグルスが、火星に接近する現象が6月に起こるとみられている。レグルスは地球から約 79 光年の距離に位置する青白い恒星で、古代から「王の星」として知られてきた。しし座の心臓部にあたる位置にあり、星座の形を特徴づける存在だ。火星は地球の外側を公転する惑星で、およそ2年2か月ごとに地球に接近する。この周期により、火星は夜空を背景に移動して見え、時にはレグルスのような明るい恒星の近くを通過することもある。レグルスは黄道に近いため、火星などの惑星との接近が起こりやすい位置にある。

今回の接近は6月 17 日に、赤みを帯びた火星と青白いレグルスとが夜空に並び、その色と明るさの対比が鮮やかに観察できるとされている。天体観測の好機として、専門家だけでなく多くの天文ファンの注目を集めている。こうした現象は天文学への理解を深める機会でもあり、観測会なども各地で予定されている。皆さんも合唱コンクールが幕を閉じた夜、西の空を眺めてみてはいかがだろうか。

今月の空

水無月 *June*

6/1　金星が西方最大離角
　　月と火星が並ぶ
6/2　月とレグルスが並ぶ
6/3　上弦
　　月面X（エックス）が見られる
6/6　月とスピカが並ぶ
6/10　月とアンタレスが並ぶ
6/11　満月
6/17,18 火星とレグルスが並ぶ
6/19　月と土星が並ぶ（午前1時～明け方）
　　下弦
6/21　夏至
6/22,23 月と金星が並ぶ（明け方、東の空）
6/25　新月
6/27　月と水星が並ぶ（夕方、西の低空）
6/29　月とレグルスが並ぶ
6/30　月と火星が並ぶ

班員募集中
兼班も大歓迎
いつでもお待ち
しています

夏至

一年で昼の時間が最も長くなる日「夏至（げし）」が、今年は6月21日に訪れる。太陽が北半球で最も高く昇るこの日は、東京では昼の長さがおよそ14時間半に達し、夜は最も短くなる。この現象は、地球の公転軌道と地軸の傾きによって生じるものである。天文学では、太陽が黄道上で最北の点「夏至点」に到達した瞬間を指し、太陽は北回帰線（北緯23.4度）の真上に位置する。日本から見ると太陽は高く昇り、影が一年で最も短くなるのもこの日だ。

古くから夏至は、農作物の成長や自然への感謝を表す重要な節目とされ、各地で祭礼や行事が行われてきた。現代においても、世界中で夏至にちなんだイベントが催されており、日本でも田植えや夏の始まりを祝う風習が続いている。夏至を境に、日照時間は徐々に短くなっていく。太陽の高さや影の変化に目を向けることで、季節の移ろいを感じ取ることができそうだ。

ちなみに、小山台高校では、毎年決まって夏至の日に、数学科から夏の課題が提示される。

星座と誕生日

しし座はラテン語で Leo(レオ)といい、7 月 23 日から 8 月 22 日生まれの人がしし座である。

天文学の発展とその役割

天文学とは、人類が自然を生きるために、天体の動きが重要な役割を果たしていたことから生まれた学問だ。太陽や月、星の位置や動きは、昼と夜、季節の移り変わりを知る手がかりとなり、農耕社会では種まきや収穫の時期を知るために欠かせなかった。また、古代の航海者たちは星を頼りに方角を知り、目的地へと辿り着いていた。さらに、天体の規則的な動きは神秘的であるとされ、宗教的な儀式や占星術とも深く関わった。これらの実用的・宗教的な目的から、人々は空を観察し記録するようになり、やがて天文学として体系化されていった。こうして天文学は、人類の暮らしと密接に関わりながら発展し、最も古い自然科学の一つとなった。

引用 写真 https://i-storage.tenki.jp/large/storage/static-images/suppl/article/image/3/32/320/32036/2/large.jpg